

尔鹿子



令和三年九月一日、発行
通巻一六五号、毎月一日発行

9月号

鈴鹿 呂仁
拾掬集 その七十二

海開き若狭の沖を引き寄せる
かなづちもビーチの主演海開
向日葵のほほ笑み返し園児バス
秋螢闇の痛みを知り尽くす
大西日魔の手に怯む昼の目
空蟬の葉陰の宿り爪甘し
二十三区同じ闇夜を持ち晩夏



東京は千に届くや百物語
吟行植物園

大楠の千の抜け殻蟬しぐれ
裸婦像へ恋の輪一つ鳶の夏
倒木の風禍の喘ぎ蟬の森
山蟻の無策無謀の修羅の森
噴水の真中に集ふ白き闇

俳句四季九月号

諍ひの尾を引く朝餉鴟猛る

近詠

和田 照海

浦祭

水無月の雨きらきらと写経終ふ
家舟には畳一枚雲の峰
島長の笛に訛や浦祭
鳩の巢や匿まつてゐる葦間舟
杣店の岩になりゆく山淑魚



近詠

松本 鷹根

鬼やんま

鴉入れ杜は晩夏を引き締める
七夕の竹の臭に故郷あり
遠花火酌みて眺めし友和む
法師蟬論し聴して老い凌ぐ
鬼やんま水に添ひ来て風に去る



塩貝 朱千



大白蓮

空のいろ海の色とも青い芥子
時計草秒針三本狂ひなし
うす紅に咲き初めて無垢大白蓮
白壁や凌霄かづら沸点に
松に添ふ榊の葉艶梅雨明ける

英華採集

蜜蜂の一家総出と言ふ家出

亀岡 近藤 富子

全国に養蜂家と呼ばれる人は何人いるのだろうか？余り多くはないと思うが、脱サラをして始める人もいと聞く。養蜂は、蜜蜂を飼育し群れを増やしハチミツ等採取することであるが農作物の受粉媒介という大きな役目を担っている。掲句は、苺等の農園への蜂の貸し出しであろうか？群れの個数を幾つも携えての遠征であるが故にかなりの大掛かりである。一家総出という言葉の面白さに加えて「家出」という結びは俳味の妙を引き出した。

なめくぢりアリバイと言ふ不行跡

福山 政時 英華

ナメクジとカタツムリは近縁で巻貝の仲間であるもカタツムリは愛嬌があり好まれるがナメクジという謎めいた物体を好む人は余りいないだろう。ナメクジは、おろし金のような多数の歯のある舌を持ち、農作物や庭の植物の花や葉をそして果実までも削り取るようにして食害する我々には身近な不快害虫である。夜行性のため食べているところを目撃することはないが、移動の際に粘液を出して歩行するため這った部分がキラキラ白っぽく光る。正しく不行跡という言葉がピッタリ嵌る。

ハンカチを感情線に握りしめ

福山 神原 三千世

人の別れには場所、時間、相手などの状況・場面により様々なドラマが生まれ、流す涙の種類も違ってくる。掲句は、いろいろ読み手の想像を掻き立ててくれる。一つの場面を設定するとすれば、去って行く人の後ろ姿を見送りながらその背に向かって沸々と湧き上がってくる思いを必死に堪えている様子が浮かび上がってくる。十七音に涙を見せない健気さがよく出ている。季語のハンカチと感情線という言葉だけの省略の効いた一句である。

萩 沼田巴字

蓑虫や人気なき空ほしいまま
蓑虫のどんぐり眼や父恋し
古代史の村とめどなし曼珠沙華
現身の炎と化すや曼珠沙華
風もまた仏の差配萩こぼる

海 月 故丸井巴水

野燕の等身影が川を切る
色好みせしちようてふの野は広し
残酷を覚ゆ少年海月干す
鯛の誘ひ鳴きあり夜が近し
一燈の涼しさに立つ警備員

星まつり 植村蘇星

青葉風入れて心の窓ひろぐ
シュレッター音さはやかに過去は過去
出合ひなる無形財産星まつり
蘇る昭和回想土用波
夕ざれや箒目崩す青嵐

梅雨満月 北川孝子

梅雨満月心地よき風身にためて
乳足りし赤子の眠り梅雨穂草
どぼ漬けにぴりつと旨きお漬物
気づかひの声は小さめ青葉雨
梅雨晴れや風が言葉をかけて来る

ひまはり 直江裕予

柴折戸の裏口あたりまでが梅雨
梅雨に入るふやけた愛のそのままに
いちめんの休田ひまはり乱れ咲く
好きだったゴッホのひまはりは何処へ
風鈴や嘘をつけない背な動く

蝸 牛 高木晶子

末っ子に末の拘り茄子の花
古家を守り固めて十字花
花棟咲いて今年の祭とす
蝸牛お前もどこか壊れたか
青ざめて木蔭を誰も出てゆかぬ

虹の根 伊藤希眸

戸口より夏日がどつと母の影
鈍色の空蒸し暑し人は生き
海神へ汗つやつやと孕み馬
薔薇散る散る足指小さくタクトとる
虹の根よ雲の支へのあればこそ

蜃 気楼 奥田筆子

地下出れば塾ビル街衢蜃気楼
求め合ふどうし絡みて凌霄花
距離置くはサラダ感覚六月来
ブラシの花咲いて界限丸洗ひ
未央柳当番ナースのつけ睫毛

神麓集

九月の樹

井上菜摘子

コスモスを旅の途中と思ひけり
秋の蝶発たせてスマホ再起動
大人になつてからが長い糸瓜垂る
夜長の灯茶渋のやうにゐて二人
もう誰も叱つてくれぬ九月の樹

予約席

村田あを衣

嵯峨面の裏はしろじろ素秋なる
明日ひらく蓮は浄土の予約席
奥嵯峨の風を乗りつぐ秋あかね
夕かなかな祇王は濁世透かし見む
支へ合ふ二尊の翳や涼あらた



丸山海道 第六句集『太白』



京鹿子集

豊田都峰選

奔放に生きサルビアの赤愛す

サルビアを結界として天主堂

五月雨や川にも今昔ものがたり

娑羅つぼみ真水のやうな朝の刻

浜木綿の領巾振る岬遣唐船

噴水のてっぺん猿の仮眠中

縞馬の縞の機嫌や風五月

梅天に隠す片脚フラミンゴ

早耳のキリンが洩らす鳥の恋

「京生れどすえ」と河馬の簾越し

京田 山中志津子

城陽 鷺山 珀眉

山彦は少年のこゑ青ぶだう
旅情かな遠く間遠く河鹿笛

青嵐疎水の空の深すぎる
サングラスかけ心眼のダンデイズム

近郷の名画百選麦の秋

十葉の無頼派としてかく増ゆる

桐の花人を遠避け人を恋ふ

みづからの重さに撓み白薔薇

滴りの清流となる峽の底

菓となりて寛ぐ御室ざくらかな

福山 亀井 福恵

雨蛙千が鳴き出す千枚田

齡経るもまだ角とれぬ冷奴

けし坊主こつんこつんと風あそび

ばばさんの段取りよろし芒種かな

サルビアの火の真ん中にゐて孤独

芥子坊主左脳の酸素入れ替へる

降る降らぬ気まぐれとほす梅雨の雲

五山消ゆ烟の中の梅雨の京

初茄子や籠にあふるる陽の匂ひ

すんなりと通らぬ真実蟻の道

水めぐり水の私語き濃あぢさゐ

枯あぢさゐ白より出でて虚空とす

菜畑や郷ゆきのバス吸ひ込まる

七変化手毬しづくの水の旅

あめんぼう水の笑くぼを弾きけり

濡れ縁の会話のとぎれ夕牡丹

恋歌の音符をなぞる黒揚羽

朝の手に初夏の青めるシャボンの香

やまびこの帰る故山や袋掛け

初夏やらくがき帖の青き鳥

福知山 西村 白杼

福山 石原 孝人

琅玕にやはらかき闇初蛩

今年またぐるり畦塗る棚田かな

雨蛙句碑に一茶の翳を追ふ

八度目は何色なるや七変化

あやとりを終へたる蜘蛛の孤独かな

蜜蜂の一家総出と言ふ家出

ゴールデンウィーク夫と静かなバーベキュー

あのころの我と決別衣更ふ

麦の秋過信せし身の老いきざす

なめくぢりアリバイ残す不行跡

葉桜やあとのまつりと言ふことも

花桐や妣の形見の帯着物

母の日やひとときは赤き包装紙

ハンカチを感情線に握りしめ

ひもすがら海を耕やす卯月波

風船の口へため息吹き込みぬ

夕焼に感染したる放水路

亀岡 近藤 富子

福山 政時 英華

神原三千世

